# 1920年代アメリカの進化論論争を振り返って——二つのドグマの衝突

山　本　貴　裕

## 目　次

はじめに
1．アメリカにおける進化論論争の歴史
2．チャールズ・フランシス・ポッターと
　ジョン・ローチ・ストラットンの論争
3．スコープス裁判
おわりに

## は　じ　め　に

アメリカでは1世紀以上にわたって，「進化論」(evolution) をめぐって科学と宗教が対立してきた。1859年にチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) の『種の起源』(*The Origin of Species*) によって体系づけられたこの科学理論によれば，地球や人間は「自然選択」(natural selection) を通して長い時間をかけてゆっくりと進化してきたとされた。他方，旧約聖書の「創世紀」(Genesis) によれば，地球や人間は神によって6日間で造られたとされた。

この二つの考え方がアメリカの大衆レベルにおいて初めて本格的な衝突を起したのが，1920年代の「モダニスト・ファンダメンタリスト論争」

(modernist–fundamentalist controversy) であった。ここでいう「モダニスト」とは，伝統的キリスト教を現代文化に意識的に適応させたプロテスタントのことであり，また「ファンダメンタリスト」とは，モダニスト神学やモダニストが奨励した文化的変化に反対したプロテスタントのことである。[1] 1920年代には進化論の受け入れをめぐって両者は分裂し，モダニストは進化論支持の立場を，ファンダメンタリストは「反」進化論の立場を打ち出した。

従来，歴史家や一般の人々の多くは，20年代のモダニスト・ファンダメンタリスト論争においてファンダメンタリストは「ドグマ的」(dogmatic) であったと批判してきた。ファンダメンタリスト自身，自分達が「キリスト教的ドグマ」の唱道者であることを認めていた。例えばファンダメンタリストの一人ジョン・ホーシュ (John Horsh) は，「一般にドグマとは，直接的証拠よりもむしろ権威に基づく信条である」と定義し，ファンダメンタリストの信じるキリスト教的ドグマとは「神の言葉に基づいたキリスト教会の信条である」と述べた。[2] 彼らにとって聖書は，神が著者に霊感を与えて書かせたものであり，故に一語一句に至るまで正しい絶対的・超自然的権威であった。「聖書無謬説」(infallibility) または「聖書霊感説」(inspiration) と呼ばれるこの教義によれば，創世紀を文字通り解釈せねばならず，したがって進化論は受け入れられなかった。

1925年テネシー州デイトンで開かれた「スコープス裁判」(Scopes Trial) は，ファンダメンタリストの聖書無謬説というドグマの脆さを露呈したが，20年代の論争にはこの裁判の結果，闇に葬り去られてしまったもう一つの側面があった。20年代当時，「ドグマ的」というレッテルはファ

(1)　「モダニスト」の定義については，William R. Hutchison, *The Modernist Impulse in American Protestantism* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1976), 2. を，「ファンダメンタリスト」の定義については，George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth–Century Evangelicalism, 1870–1925* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1980), 4. を参照した。

(2)　John Horsch, Modern Religious Liberalism: *The Destructiveness and Irrationality of the New Theology* (New York: Garland Publishing, Inc., 1988[1921]), 54.

ンダメンタリストのみに対して用いられたものではなかった。ファンダメンタリストは，進化論やそれを無批判に受け入れたモダニズムこそドグマ的であると批判していた。

このもう一つのドグマの存在は，スコープス裁判でのファンダメンタリストの一方的敗北の陰に隠れ，以後しばらくの間，公の場で議論されることはなくなったが，1970年代以降，アメリカの法廷やアカデミックな世界において再び問題視されるようになってきている。最近のこうした動きは決して時代錯誤なものではなく，スコープス裁判においてこの論争が決定的な解決をみておらず，この裁判で明るみに出ることのなかったもう一つの側面が遅ればせながら表面化したものであると考えることができる。過去または現在のアメリカの進化論論争を正しく理解するためには，今まで無視される傾向にあったこの論争のもう一つの側面を考慮に入れる必要がある。

本稿では1920年代の進化論論争を「二つの」ドグマの衝突として捉え直した上で，この論争の結末が後のアメリカ文化に与えた影響を再評価してみたい。

## 1.　アメリカにおける進化論論争の歴史

アメリカのプロテスタントは17世紀以来，科学と宗教は矛盾しないと考えてきた。だが，南北戦争後にダーウィンの進化論が広まるにつれ，科学と宗教の関係は変更を迫られる。ダーウィン以前にも様々な形の進化論が存在していたが，ダーウィンの進化論の重大さは，一つの種が別の種へと漸次変化していく過程を説明する信憑性のある機構（自然選択）を初めて示したことにあった。この理論の登場により，それまでは神の創造力を引き合いに出さねば説明できなかった，種の起源や動植物の環境への適応という究極的な問題でさえ，神への言及なしにもっともらしく説明できるようになった。要するに，神は科学から追い出されたのである。[(3)]

(3)　次頁へ掲載.

とはいえ，ダーウィン思想の本格的な衝撃は，アメリカのプロテスタントにすぐには伝わらなかった。進化論発表当時，科学と宗教は完全に調和していると考えていたプロテスタントの大半は最初，進んで進化論を受け入れた。進化論と創世紀の文字通りの解釈をいかに両立させるかという問題も，19世紀前半の時点で，創世紀において天地創造にかかったとされている6「日」(days) というのは実際には地質学的な年代区分の最大の単位である「累代」(eons) と同じである，という共通見解が形成されていたために，回避することができた。また，進化論は人間の尊厳を汚すものであるという反対意見も，神が進化の過程の最後に介入し，人間という種を特別に創造したと説明することで，かわすことができた。つまり，彼らは進化論と創世紀は調和可能であると考えたのである。[4]

しかし，第一次世界大戦を契機に，保守的プロテスタントの進化論に対する当初の寛容さは消え，1920年代までには，反進化論が彼らの基本的信条の一つとなった。この変化の過程についてはジョージ・マーズデン (George Marsden) によって詳しく分析されているが，簡単に言えば，保守的プロテスタントは第一次世界大戦中のアメリカ社会のヒステリー状態に感化され，ドイツ軍事主義の背後にモダニスト神学の影響を，さらにその背後に進化論の影響をみるようになった。斯くして第一次世界大戦後，ファンダメンタリズムとして正式に組織化された彼らの運動は，アメリカ文明の救済という大義名分を掲げ，1920年前半，進化論や進化論を受け入れたモダニズムに対する本格的な戦闘を開始するのである。[5]

---

(3) James Turner, *Without God, Without Creed: The Origin of Unbelief in America* (Baltimore: Johns Hopkins Univ. Press, 1985), 179–87.

(4) Marsden, "Evangelicals and the Scientific Culture: An Overview," *Religion and Twentieth-Century American Intellectual life,* edited by Michael J. Lacey, (New York: Woodrow Wilson International Center for Scholars, 1989), 33–37.

(5) Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 141–53. 森孝一「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」『キリスト教研究』第46巻第2号 (1985), 217–18.

## 2. チャールズ・フランシス・ポッターとジョン・ローチ・ストラットンの論争

1920年代のモダニスト・ファンダメンタリスト論争といえば，1925年のスコープス裁判が最も有名であるが，この裁判の前段階で最も一般の注目を集めたのが，1923年から1924年にかけてニューヨークを舞台に，ジョン・ローチ・ストラットン (John Roach Straton) (1875–1929) とチャールズ・フランシス・ポッター (Charles Francis Potter) (1885–1962) との間で繰り広げられた一連のモダニスト・ファンダメンタリスト論争であった。ストラットンはカルバリ・バプテスト教会の牧師であると同時に全国的に有名なファンダメンタリストであった。他方，ポッターはウェストサイド・ユニテリアン教会の牧師であり，かつ著名なモダニストであった。満員の聴衆の前で行われ，ラジオで生放送され，報道機関から大々的な扱いを受けた両者の論争は，モダニストとファンダメンタリストとを分かつ問題点をアメリカ国民の前に余すことなく示し，後のスコープス裁判の前触れとなった。[6] 次に，その中から1924年1月28日，カーネギーホールにて約3500人の聴衆を前に開かれた第二回目の討論「進化論対創造説」を取り上げ，そこにみられる両者の相反する議論を詳しく比較分析してみよう。

この討論において，ポッターは「地球や人間は進化により生じた」という命題を肯定する立場をとり，ストラットンはそれを否定した。ポッターはユニテリアンになる以前，バプテストであった。逆に，ストラットンはかつて進化論者であったが，創世紀の真理に立ち戻った，という経歴をもっていた。したがって，両者とも互いに相手の議論には精通しており，両者の議論は拮抗した。各々が挙げた証拠も決定力を欠き，最終的にこの議論は，聖書の権威を信じるか，科学の権威を信じるかという二つのドグマ

(6) Edited by Joel A. Carpenter, *Fundamentalist versus Modernist: The Debates between John Roach Straton and Charles Francis Potter,* (New York: Garland Publishing, Inc., 1988), Editor's Note

の闘いの様相を呈した。

当時，聖書の権威は「聖書無謬説」によって支えられていた。この教義はそもそも，聖書の権威に挑戦した「高等批評」(Higher Criticism) への反動として，1880年代にプリンストン神学校で生まれたものであった。1870年代のプリンストン神学者は，たとえ聖書に少々の誤りが含まれていたとしても，全体的にみれば，それは聖書が神の霊感を受けて書かれたことを否定しない，という緩やかな立場をとっていた。しかし，1880年代に入ると，一つの誤りでも証明されれば，それは即，聖書霊感説を否定することになるというより極端な立場へと態度を硬化させた。加えて，無謬性の主張は現在の聖書ではなく，もはや存在しない「オリジナル」の聖書に限定されるようになった。こうした立場の変化の背後には，高等批評家によって聖書の誤りや矛盾が次々と発見され，もはや無視できなくなったという苦しい事情が存在した。(7)

他のファンダメンタリストが採択したのも，このより極端な形の聖書無謬説であった。この教義は聖書の権威を始めから受け入れる者には説得力をもったが，彼らの前提を共有しない者にとっては，全く説得力をもち得なかった。事実，1923年12月20日カルバリ・バプテスト教会で開かれたストラットンとポッターの第一回目の討論では，ストラットンが聖書の無謬性を示す諸々の証拠であるとするものを提示したのに対して，ポッターは高等批評的見地から反論を展開し，聖書無謬説の脆さを暴いた。この討論の審査は，ニューヨーク最高裁判所判事のアルメッド・F・ジェンクスとアーネスト・L・コーナント，マサチューセッツ州リンの元市長C・ニール・バーニー（そのうち二人は聖公会に属し，一人はユニバーサリスト）によって行われ，その結果，2対1でポッターが勝利を収めた。(8) つまり，

(7) Ernest Sandeen, *The Roots of Fundamentalism: British and American Millenarianism, 1800–1930* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1970), 103–31. 森, 200–201.

(8) *The Battle Over the Bible,* (New York: George H. Doran Company, 1924), *92.* Rpt. in *Fundamentalist versus Modernist*

聖書無謬説は大勢の人々の前で高等批評によって論破されたのである。

他方，進化論の方も全く議論の余地が無いわけではなかった。1923年4月11日付けのリベラル派の政治雑誌『ニュー・リパブリック』は，スタンフォード大学の著名な動物学教授ヴァーノン・ケロッグ (Vernon Kellog) による "Where Evolution Stands Today" という記事を載せ，今日の科学者は進化の「事実」については何の疑問ももっていないが，これまで提出されてきた様々な進化の「起因」の妥当性については疑問を抱いている，と紹介した。ケロッグによれば，ダーウィンの時代に進化の起因の説明として主流であった二つの見解，即ち，獲得形質遺伝を主張したラマルク説と自然選択を主張したダーウィン説は，双方とも支持されなくなっていた。さらに，ダーウィンの時代の後，進化の起因として，突然変異やメンデル遺伝が提案されてきたが，何れも一般的受容をみていなかった。反進化論者は，進化など存在しないと「ドグマ的に主張する」代わりに，「進化の起因に関して進化論者の間に存在するこの不確実性」を突けば，彼らを「もっと困らせることができるだろう」[9]。

要するに，当時，聖書と進化論はともに決定的な確実性を欠いていた。だからこそ逆に，両者の論争はよりドグマ的な様相を帯びたといえる。ポッターとストラットンの間で繰り広げられた創世紀と進化論の論争では，両者とも，相手の見解より自分の見解の方が合理的であり，相手は証拠不十分な仮説を科学的真理として他人に押し付けようとしている，と主張した。ポッターはまず，進化論の正しさを示すための第一段階として，聖書の創世紀を相対化することから始めた。彼は創世紀を「野蛮であまり文明化されていない」諸族の天地創造の物語と同列に置き，前者はオリジナルな部分とバビロニア人やカルデア人等の創造神話から借りてきた部分から成っている，と説明した。彼の目論見は，聖書の超自然的起源を否定し，それをある時代の人間による創作であると位置付けることによって，論敵

(9) Vernon Kellog, "Where Evolution Stands Today," *The New Republic* (April 11, 1923): 179–81.

の依って立つ絶対的基盤を崩すことにあった。ポッターはこの夜の討論に参加した理由を次のように述べた。「今日のファンダメンタリストはアメリカの公立学校において，この原始的ヘブライ人の伝説を，現実に即した科学的真理として教えようとしている」。そして彼は，「創世紀による天地創造の物語よりもっと合理的な仮説」として，進化論を提示した。[10]

他方，反進化論者ストラットンは，「進化論は科学的事実ではなく，哲学的ドグマである」と主張した。ファンダメンタリストは，一般に考えられているように，科学そのものを否定したのではなかった。ストラットンも，「真の科学には敵意を抱いていない。我々が反対しているのは，単なる仮説があたかもそれが事実であるかのようにドグマ的に宣言されることである」と述べている。ストラットンは「理性的な人間に理解できる，説得力のある事実によって」進化論を立証するよう相手側に要求し，この討論における自分の仕事は，それが立証不可能であり，「いわゆる進化論よりもはるかに明確で単純な方法が存在する」ことを示すことである，と主張した。[11]

聖書の創世紀によれば，「神はご自分にかたどって人を創造された」とある。もしこの聖書の説明が真実でないなら，「どのように人間がこの惑星に現れたかは全く分からない」ことになる。ストラットンはケロッグの指摘した進化論の弱点，即ち進化の起因を説明できないという点を突き，進化論全体を覆えそうとしたのだった。ストラットンはポッターの言葉そのまま返すように，次のように訴えた。進化論は「この国の少数派グループ」によって「今日学校の子供達に，それがあたかも立証された真理であるかのようにドグマ的に教えられている。私達は，こういった途方もない推測や理論の代わりに，事実を要求する完全な権利を有している」。[12]

ストラットンの反進化論的見解に対し，ポッターは次のように反論した。

(10) *Evolution Versus Creation* (New York: George H. Doran Company, 1924), 11–17. Rpt. in *Fundamentalist versus Modernist*

(11) *Ibid.*, 30–37.

(12) *Ibid.*, 46–53.

ストラットンは「進化論は仮説に過ぎない」と言うが，「創世紀もまた仮説に過ぎず，しかももっとひどい仮説である。」ストラットンが言うように，天地創造の時の人間の様子は「私には分からない。何故なら，私はそこにいなかったからである」。しかし「同様に，私の論敵も知らない。何故なら，彼はそこにいなかったからである」。ポッターの反論に対して，ストラットンは，何千年もの間，文明の礎となってきた聖書を否定するのであるから「立証責任」は相手の方にある，しかし，理性的な人間にとって受け入れ可能なそうした事実は相手側から示されていない，と一歩も譲らなかった。ポッターは，「聖書を権威とすべきではなく，進化論を信じる以上に聖書の言うことを信じる根拠はない」と主張するが，「私は，十分な根拠がある，と発議したい」[13]。

聖書の正しさの根拠に関してはすでに第一回目の討論で議論し尽くされていたので，第二回目の討論の大部分は，進化の証拠とされた諸々の事実の信憑性をめぐる議論に費やされた。当時のほとんどの科学者は，進化のメカニズムに関しては確信をもっていなかったものの，進化の事実については確信していた。ポッターを始めとするモダニストも科学者の見解をそのまま受け入れ，彼らに倣って進化の証拠とされる事実を提示したが，それに対してストラットンは悉く反証を挙げた。同じ事実でも視点の違いにより，進化の証拠であるともないとも解釈できた。換言すれば，両者の論争は二つのパラダイムの衝突であった。

人間の進化を裏付ける証拠として提出されたものには，大まかに分類すると生物学的証拠と地質学的証拠の二種類があった。ポッターは進化を肯定する生物学的証拠の一つとして，「人間と他の動物との類似性」を挙げた。これに対してストラットンは，人間と猿は形態的に似ているので同じ先祖をもつという議論は，「あらゆる論理とあらゆる常識と健全な理性の名において」，それに基づく「驚くべき結論」を証明しない，また「類似性は類似性以外の何物をも証明しない」，と反論した。ストラットンはそ

(13) *Ibid.*, 86–97.

の例として，自分はしばしば元大統領ウィルソンに似ていると言われるが，決してウィルソンの家系ではない，と言った。確かに，人間と猿の間には類似点もあるが，それを遥かに上回る相違点が存在し，それはとりわけ「精神や道徳的・宗教的本能の領域」において顕著である。[14]

ポッターによれば，人間の体にみられる虫垂や尾骨，親知らず等，「多くの退化の痕跡」も進化の証拠とされた。これらの痕跡器官はかつては役に立ったが，現在では全く役に立たないと考えることができた。他方，ストラットンは，これらが本当に役に立っていないと言い切ることはできない，と反論した。また，進化論者はしばしば，人間が猿を祖先とすることの強力な証拠として「尾骨」を引き合いに出すが，それは猿を祖先にもたない魚類にもみられることから，進化を証明する証拠とはならない。[15]

ポッターは，人間の胚がその成長の過程において，原始的単細胞動物から魚類，爬虫類，哺乳類，そして人間と，動物の進化の全段階を通過する，という事実も進化の証拠として引証した。しかし，ストラットンによれば，「発生反復説」(recapitulation) として知られるこの考え方は，長い時間を要するゆっくりとした過程を前提とする進化論の原則と矛盾する。さらに，人間の胚と下等動物の胚との類似性は表面的なものであって，本質は異なっている。逆に，人間と下等動物の類似性は，「万物が唯一神によって創造されたという事実」によって合理的に説明できる。[16]

ポッターが挙げた生物学的証拠の中でもとりわけ論争を招いたのが，科学者によって実際に作られた新種の昆虫や植物の存在であった。ポッターはその例として，刺のないサボテンやローガンベリー，50種類以上のショウジョウバエの新種等に言及した。それに対して，ストラットンは，人為選択によって改良された動植物の型は，人間の手を離れた途端，元の型に戻ってしまうという厳然たる事実が存在する，と抗論した。また，ポッター

---

(14) *Ibid.*, 22–23, 57–59.

(15) *Ibid.*, 23, 59–60.

(16) *Ibid.*, 24, 60–63.

は新しい種が生産されてきたと主張するが，その主張は誤っている。例えば，ローガンベリーは「新しい種ではなく，単に，同じ種に属する二つのベリーから来る組み合わせにすぎない」。確かに，種「内」の変種は生産されてきたが，「種の境界線を飛び越えたり，獲得形質が遺伝することは証明できていない。」[17]

ストラットンの反論に対して，ポッターはさらに，それは「見掛け倒しの議論」に過ぎない，「種は徐々に属になって行き，属は科へ，科は目へ…そして最後には私達自身の原始的先祖へと遡る。諸々の種の間に線を引くことはできない」と主張した。他方，ストラットンは，ポッターの挙げた証拠は進化を証明するものとしては依然として全く不十分である，と一歩も引かず，反対に，聖書の教えが真実であることを示すいくつかの生物学的事実を挙げた。例えば，創世紀において神は，あらゆる生命体が「その種にしたがって」(after its kind) 増えるよう命じられるが，このことは「種は固定されている」という事実によって裏付けられている。また，自然には神によって定められた境界線があり，その線を越えると「不稔」(sterility) という結果が生じるという事実，「半分しか形成されていない翼や出始めた足，不完全な目は，個体にとって役に立たないばかりか，障害となる」という事実等によっても，進化論の誤りと創世紀の正しさを証明する。[18]

このように進化を裏付けるとされた生物学的証拠は，見方によっては全く証拠としての資格を失った。そして同じことが地質学的証拠についてもいえた。ポッターは進化を裏付ける地質学的証拠として，地殻変動が起きていない場所では「最下部の地層から最上部の地層に移るにつれ，下等動物から高等動物へと漸次的進歩がみられる」という事実を挙げた。また，古代人の化石も発見されており，それによれば，約2万5千年前の後氷期にはクロマニョン人が，それより倍昔にはネアンデルタール人が，約15万

(17) *Ibid.*, 25, 56–57.
(18) *Ibid.*, 92, 100–104.

年前にはピルトダウン人が，約37万5千年前にはハイデルベルグ人が，そして最古のものとしては，約50万年前にピテカントロプスが生きていた。これら古代人の解剖学的構造を比較すれば，「猿のような形から現在の人間の骨格へと一様に成長してきているのが分かる」。我々の先祖の化石の発掘は始まったばかりであるが，「すでに初期の型と現在の型とをつなぐ数々のいわゆる『失われた環』(missing links) を示唆するに十分な数が発見されている」[19]。

ポッターが挙げた地質学的・古生物学的証拠に対して，ストラットンは次のように反論した。こういった化石の証拠は「しばしばあまりにも不十分なので，特に，神の言葉としての聖書への人類の長年の信仰を一掃するための基盤としては，全く信頼できない」。地質学者や地質学に頼る進化論者は「堂々巡りの議論をしている」。「彼らは証明されるべきことそのものを前提とする。地質学者は，最も古い岩石は最も単純な形の生命を含むので最も古いという。進化論者は，最も単純な形の生命が最も古い岩石中にあるので進化は真であると言う」[20]。

科学者自身，進化を証明する化石の記録がほとんど存在しないことを認めていた。ダーウィンももし自分の仮説が正しいなら，あらゆる種を結び付ける「無数の中間種」が存在するはずであるが，それらは一つとして発見されていないという事実を認めつつ，中間種の化石が見つかっていないのは，地質学的記録が「極端に不完全」だからである，と弁解した。以来，科学者達は，「失われた環」を発見するために必死の努力をしてきた。いわゆる「猿人」もその一例であるが，当時のアメリカにおける最も積極的な進化論支持者であった全米自然史博物館館長ヘンリー・F・オズボーン (Henry F. Osborn) でさえ，その数が極めて少ないことを認めていた。ストラットンは言う。「もし進化が，過去のあらゆる時代と場所で作用してきた普遍的法則なのであれば，何故これ程まで証拠が不足しているのだろ

(19) *Ibid.*, 19–22.

(20) *Ibid.*, 64–65.

う」。また，発見された証拠についても，ただ数が少ないだけでなく，その信憑性も甚だ疑わしい。例えば，1912年イギリスのサセックス州ピルトダウンで発見された「ピルトダウン人」(Piltdown man) の場合，発見されたのは2，3の頭蓋骨破片と顎骨一片，犬歯一本に過ぎず，また，これらすべてが同一人物によって同時に発見されたわけではなかった。このような「いい加減な状況の下」，科学者達はピルトダウン人を復元したが，科学者の間でさえ，復元像の正確な形をめぐっては論争が続き，挙句の果てには，ピルトダウン人のものとされている顎や歯はチンパンジーの化石である，と主張する者まで現れた。こうした不十分な証拠に基づき，進化論の正しさを法廷において証明しようとしたなら，「裁判官と陪審員の双方によって，最大の軽蔑をもって，法廷から却下されるであろう」[21]。

ストラットンは自分の主張を裏付ける科学的権威として，ネブラスカ州ユニオン大学地質学教授ジョージ・プライス (George Price) を引き合いに出した。カナダ生まれのセブンスデー・アドベンティストであった彼は，1925年までカリフォルニア州やネブラスカ州の小さな大学で教えた後，イギリスに移り，そこでの反進化論演説や出版物によってかなり大きな反響を呼び起こした。プライスは，これまで進化論的「偏見」のために，岩層の配列が「非現実的で不自然な方法」で年代別に分類されてきた，と主張し，進化論に代わる「より合理的な」仮説として，かつて世界規模の洪水があったという聖書的見解を提示した。当時，ほとんどの著名な科学者が反進化論運動に反対の立場をとっていた中，プライスの議論は反進化論者によって最も頻繁に援用されることになった[22]。

以上のように，ポッターとストラットンの第二回目の討論の大半は，進化の証拠をめぐる両者の攻防に費やされた。聖書の無謬性をめぐる第一回目の討論において聖書無謬説が防戦を強いられたように，第二回目の論争では進化論が防戦を強いられた。後者の審査は，ニューヨーク最高裁判所

(21) *Ibid.*, 64–72.
(22) *Ibid.*, 72–78.

判事アルメット・F・ジェンクス，フィリップ・J・マクックと戦時産業委員会元会長フランク・P・ウォルシュによって行われ，全員一致で進化論否定派ストラットンの勝利が宣告された。[23]『ニューヨーク・タイムズ』紙は第二回目の討論の内容と結果を翌日の記事で報じた。[24]

この時点においては，聖書と進化論，または各々の正しさをドグマ的に擁護したファンダメンタリストとモダニストは，お互いに決め手を欠いたまま，互角の闘いを続けていた。この論争の行方はまだ決定されていなかった。

## 3.　スコープス裁判

進化論論争に決定的な影響を与えたのが，1925年7月10日から21日にかけてテネシー州デイトンで開かれたスコープス裁判であった。この裁判の直前には，ファンダメンタリズムは最高潮に達し，南部の諸州において反進化論法を通過させることに成功し，他の州においても同様の法案が懸案となっていた。ところが，スコープス裁判以降，この運動は急速に勢いを失い，突如として崩壊するのである。

この裁判の被告ジョン・スコープス (John Scopes) はその年の春にテネシー州議会で制定された，公立学校での進化論教育を禁じた反進化論法に違反したかどで起訴された。スコープスは同州のある高校で2週間ばかり病欠の校長に代わって生物の授業を教えたに過ぎなかったが，デイトンを有名にして金儲けをしようと考えた地元の名士に説得され，同法の合憲性を試すという大義名分の下，自ら被告人として名乗り出た。後に彼は，このとき自分が本当に進化論を教えたかどうか確かではなかったと述べている。スコープスは軽い気持ちで被告の役を引き受けたが，検事側に過去三

(23)　*Ibid.*, 111.

(24)　*The New York Times* (January 29): 9. 同紙は，2月1日，2日付けの記事では，審査員や会場の聴衆の大多数がストラットンの議論を支持したが，ラジオ受信者の調査によると，57対43でポッターの勝ちという結果になったと報告している。*Ibid.*, (February 1, 1924), 6.: *Ibid.*, ((February 2, 1924), 12.

度，民主党から大統領候補として出馬し，ウィルソン政権下では国務長官を務めた有名な政治家ウィリアム・ジェニングス・ブライアン (William Jennings Bryan) を，弁護側には著名な法廷弁護士であり，かつ「不可知論者」(agnostic) として知られたクラレンス・ダロウ (Clarence Darrow) を迎えてのこの裁判は，ラジオや新聞等のメディアを通じて，全米のみならず，世界の注目を集める一大メディアイベントとなった。[25]

蓋を開けてみれば，この裁判の大半は，スコープスの有罪無罪や反進化論法の合憲性をめぐる議論ではなく，聖書の正しさを主張する検察側と進化論の正しさを主張する弁護側のプロパガンダ合戦に費やされた。裁判のほとんどが本筋から外れたために，陪審員は実質8日間にわたる裁判中，15分しか法廷内にいることを許されなかった。

問題のテネシー州反進化論法は正確には次のようなものであった。「一部または全部を州の公立学校基金によって補助を受けている大学，師範学校，またはその他の公立学校において，聖書で教えられている神による人間創造の記述を否定する説を教えたり，代わりに人間は下等目の動物の子孫であると教えることを違法とする」。検察側は，科学者や聖書学者の証言により，進化論とは何か，そして聖書と進化論は矛盾しないことを示した上で，スコープスは同法に違反していないと訴えようとした。しかし検察側は専門家の証言は「適当ではない」として弁護側の作戦を封じる作戦に出た。これに対して，弁護側のダットリー・マローン (Dudley Malone) は，検察側も自分達の専門家の証言をもって反論できるのに「何故恐れる」と問いかけ，「真理は常に勝利し，私達はそれを恐れない。真理は臆病ではない」と主張し，傍聴人から拍手喝采を浴びた。[26]

(25) Edited by Willard B. Gatewood, Jr., *Controversy in the Twenties: Fundamentalism, Modernism, and Evolution,* (Nashville: Vandervilt Univ. Press, 1969), 331–41.

(26) *The World's Most Famous Court Trial: State of Tennessee v. John Thomas Scopes: Complete Stenographic Report of the Court Test of the Tennessee Anti-Evolution Act at Dayton, July 10 to 21, 1925, Including Speeches and Arguments of Attorneys,* (New York: Da Capo Press, 1971[1925]), 186–88.

専門家の証言を認めるか否かの議論は，裁判四日目の後半に始まって，五日目すべてを費やした末，六日目に入ってようやく，それを認めないことで一応の決着をみた。それは，検察側の議論が勝ったからというよりも，ジョン・T・ロールストン判事がファンダメンタリスト寄りの見解の持ち主であったという単純な理由によるものであった。弁護側の抗議に対して，ロールストン判事は，陪審員を外した上で，上訴用の記録として，弁護側の専門家の証言を残しておくことに辛うじて同意しただけだった。七日目には実際に専門家の証言が読み上げられ，印刷物の形で報道機関に配られた。[27]

専門家の証言がこの裁判から排除されたとき，ダロウを含め誰もが弁護側は不利になったと思った。専門家の証言が認められないとなると，唯一残された審議事項はスコープスが州法に反して進化論を教えたかどうかという点のみであり，スコープス自身，それを認めている以上，弁護側に勝ち目はなかった。しかし，状況は七日目の後半に入って一転する。追い詰められた弁護側は，最後の手段として，上訴用の記録を残すためと称して，検事ブライアン自身を証人として尋問することを要求した。これに対して，ブライアンは，ダロウ以下弁護人3名を後で同じく証言台に立たせるという条件付きで，彼らの要求を受け入れた。[28]

ダロウはこのまたとない機会を利用して，ブライアンの無知を大勢の傍聴人や報道関係者の前で印象づけることに成功する。次に挙げるノアの洪水をめぐる両者のやり取りは，この尋問の雰囲気をよく表わしている。洪水に関する聖書記述を文字通り信じているか，と尋ねられたブライアンは，聖書には大主教ジェームズ・アッシャー (James Ussher) の計算が書いてあるが，自分にはそれが正確であるとは言うつもりもないし，また自分で計算したこともない，と答弁した。ダロウが「何からの計算か？」と追求すると，ブライアンは「私には言えない」と言い，さらにダロウが「人類

(27) *Ibid.*, 201–80.

(28) *Ibid.*, 284.

の系譜からか？」と問うと，ブライアンは「それについては言いたくない」と答えた。そこで，ダロウが「あなたは一体何について考えるのか？」と尋ねると，ブライアンは「私は考えないことについては考えない」と言い，さらにダロウが「あなたは考えることについては考えるのか？」と問い詰めると，ブライアンは「時々は」と答え，傍聴人から笑いを招いた。[29]

法務長官スチュワートはブライアンを助けるため，この尋問の進行に抗議するが，ブライアン自身の意思によってそれは続行され，その結果，ブライアンが古代文明や他の宗教，歴史言語学等について「知らない」ことが浮き彫りにされた。ブライアンが自分の見解を支持している科学者として前述のジョージ・プライスの名を挙げたときも，ダロウは，プライスは小さな大学の「ぺてん師 (mountebank), 否，詐称者 (pretender) であり，地質学者ではない」，と嘲った。地球の年齢に関する再三の追求の後，ダロウが「地球は6日で造られたと思うか」とブライアンを問い詰めたところ，ブライアンはついに「各24時間からなる6日ではない」と言ってしまった。聖書無謬説を否定するこの発言は，ファンダメンタリズムの代弁者ブライアンの口から発っせられたが故に，ファンダメンタリストの立場にとって決定的な痛手となった。[30] そもそもブライアンは当時の平均的ファンダメンタリストとは異なり，聖書の無謬性を心底信じていなかった。彼の伝記家が言うように，彼は聖書の直解主義者だったから反進化論者になったのではなく，反進化論者であったから聖書の一部を直解的に解釈しただけだった。[31] 結局ブライアンは，本来は自分が引き受けるべきではない役を引き受けてしまったことになる。

ブライアンの失態を見るに見かねた法務長官スチュワートは，彼を助けるために，この尋問は違法であると抗議し，「この尋問の意味は何か」と

(29) *Ibid.*, 287.
(30) *Ibid.*, 288–99.
(31) Lawrence Levine, *Defender of the Faith: William Jennings Bryan, The Last Decade, 1915–1925* (New York: Oxford Univ. Press, 1965), 349–50. quoted in *Controversy*, 333. 森氏もブライアンと当時の平均的ファンダメンタリストとの相違点を指摘している。森，226–28.

問いかけた。そのとき，怒りに燃えたブライアンとダロウの口から，この裁判の本当の意味が明るみにされた。ブライアンが「その目的は，聖書を信じるすべての者をからかうことである」と言うと，ダロウは「我々の目的は，頑固者 (bigots) や無知な者 (ignoramuses) が合衆国の教育を支配するのを防ぐことである」と答えた。これに対してブライアンは，「私は単に，神の言葉を合衆国最大の無神論者，否，不可知論者から守ろうとしているだけである。私は彼を前にして証言台に上がり彼の思い通りにさせることを恐れていない，ということを記者の人達に知って欲しい。私は世界の人々に知って欲しい」と言い，傍聴人の拍手を受けた。スチュワートの度重なる制止を無視して，ダロウとブライアンはその後しばらく押し問答を繰り返した。[32]

裁判は八日目に入って，呆気ない幕切れを向かえた。結局，前日のブライアンの証言は，上訴の場合の懸案となるであろう問題に関係ないというロールストン判事の判断により，記録から削除されることになった。そして，時間を節約するために，陪審員を法廷に入れ，被告に有罪判決を下すよう指示してはどうか，とダロウが提案したところ，早期の裁判終結を望んでいたスチュワートも同意し，裁判は一挙に幕を閉じることとなった。ダロウによるブライアンの尋問が記録上，抹消されてしまった以上，ブライアンが弁護側を逆尋問し，進化論の弱点を人々に示す機会も自動的に消滅してしまった。[33]

最後に，二日目の退廷以来，裁判の進行状況を一切知らされていなかった陪審員が，ようやく入廷を許可され，検察側と弁護側の最終弁論を聞いた後，10分足らず協議しただけで，スコープスの有罪判決を下した。[34]スコープスは最も軽い罰金100ドルを払っただけで自由放免となった。他方，ブライアンは形式上は勝訴したものの，メディアによって笑い者にされた挙

(32) *World's Most Famous Count Trial*, 298–304.

(33) *Ibid.*, 92, 305–308.

(34) *Ibid.*, 92, 308–13.

句，裁判の5日後には裁判のショックからか急死してしまった。

スコープス裁判によってファンダメンタリズムに対する一般の人々のイメージは一変した。元来この運動は「北東部・中西部の都市」を拠点として発展してきた「知的」な側面をもつ運動であったが，この裁判以降それは，人々の頭の中で，「南部」の「無知な田舎者」による時代錯誤な運動という烙印を押されてしまった。振り返ってみれば，スコープス裁判の前に行われたポッター・ストラットン論争の舞台は北部，ニューヨークであり，その内容もかなり知的な性格をもっていた。しかし，スコープス裁判はこの運動が元来有していたそういった側面をすっかり忘れさせるだけの印象度をもち，またブライアン死後の2年間における一部のファンダメンタリストによる過激な行動は新しいファンダメンタリストのイメージに信憑性を与えることになった。(35)

## おわりに

最後に，モダニスト・ファンダメンタリスト論争の結末，即ち，スコープス裁判におけるファンダメンタリストの一方的敗北，がその後のアメリカ文化に与えた影響を考察して，本稿の結びとしたい。

この問題を考える際に留意すべきは，スコープス裁判以前の一般的アメリカ人の間では，聖書と進化論の論争は未だ決着がついていなかった，という事実である。ストラットンとポッターの論争においても，満員の聴衆やラジオ受信者，新聞記者の注目の中，前者が擁護した聖書無謬説は破れたが，同様に，後者が擁護した進化論の正しさも否定された。聖書無謬説を守ろうとしたファンダメンタリストは，進化論を擁護したモダニストや科学者に抵抗するだけの知的・文化的力を保持していた。そればかりか，反進化論法制定の動きにみられるように，形勢はファンダメンタリスト有利に展開していた。

ところが，ファンダメンタリストの本拠地，デイトンで開かれたスコー

(35) Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 188–93.

プス裁判の結果，進化論は無傷で残ったが，聖書無謬説というファンダメンタリストのドグマのみが，社会的信用を失うことになった。他方，進化論のドグマ性を人々に示す機会がなかったわけではない。弁護側が専門家の証言によって進化論の正しさを示そうと試みたとき，ファンダメンタリスト寄りの姿勢をもつ検察官や判事によって，そのような証言は一切排除されてしまった。しかし，その中には，ポッターがストラットンとの論争の中で用いたのと同じ類の議論が含まれていた。それはつまり，弁護側が提示した専門家の証言は完璧なものではなく，ストラットンがポッターに対して行ったのと同様の反論の余地が十分あったことを意味している。ストラットンは進化論の証拠不足を批判し，もしそのような不十分な証拠に基づき，進化論の正しさを法廷の場で証明しようとしたら，「裁判官と陪審員の双方によって，最大の軽蔑をもって，法廷から却下されるであろう」と言ったほどであった。

1991年に *Darwin on Trial* を出版した UCLA バークレー校の法学者フィリップ・ジョンソン (Phillip Johnson) によれば，スコープス裁判は「ダーウィニズムのＰＲの勝利」であったという。ジョンソンは1920年代に進化論の証拠とされたものの数の少なさと信憑性の怪しさに着目する。例えば，この裁判には登場しなかったものの，1920年代の代表的進化論擁護者であったヘンリー・オズボーンは，進化論の正しさの証拠としてピルトダウン人の化石に依拠したが，この化石は今となっては詐欺であったことが確認されている。「もしあの時オズボーンがダロウと同じくらい頭の良い弁護士に尋問され，Ｈ・Ｌ・メンケンと同じくらい容赦のないコラムニストに風刺されていたなら，彼もブライアンと同じくらいばかげて見えたろう」[36]。

しかし，実際はそうならなかった。弁護側が用意した専門家の証言が裁判から除外されたとき，進化論の弱点を一般の人々に示す機会もまた失わ

(36) Phillip E. Johnson, *Darwin on Trial* (Illinois: InterVarsity Press, 1993[1991]), 5–6.

れてしまった。さらに，ブライアンがダロウの作戦にはまり，自分の無知を公衆の面前にさらしたとき，人々の記憶に残ったのは，ファンダメンタリズムの愚かさだけであった。それ以降，主流アメリカ文化において聖書の権威は失墜する一方，進化論は無条件に受け入れられ，現代アメリカ人の世俗的価値観の基盤を提供することになった。

とはいえ，主流アメリカ文化の陰には常に，進化論を問題とする多くの一般的アメリカ人の存在があった。特に1970年代以降，20年代の進化論論争は復活している。新たな進化論論争において反進化論者は，進化論は単なる理論であって科学的真理ではない，「進化論という科学」とは別に「創造科学」(creation-science) がある，公立学校においてこれらの「二つの科学」を同じだけの時間を用いて教育すべきである，と主張する。1980年代初頭に行われたある世論調査によれば，公立学校において進化論とならんで創造科学を教えるべきだと答えた人が76％に上るという。[37]

創造科学は，1920年代にファンダメンタリストがしばしば引き合いに出したジョージ・プライスの後継者達によって確立された。彼らは聖書を直接引き合いに出さないものの，聖書直解主義を前提とし，地球の誕生は古くとも約1万年前のことであり，文字通り6日間（1日24時間）で天地創造は完結した，と主張する。[38] それとは別に，最近，前述のジョンソンを中心とした一流大学の学者グループによって，聖書無謬説に基づく創造科学とは一線を画す，「単なる創造説」(mere creation) と呼ばれる運動が展開されている。彼らは創世紀の文字通りの解釈に固執することなく，単に「創造主」(a creator) の実在を主張するより広い立場を打ち出している。他方，彼らによれば，進化論は科学的証拠に基づいておらず，むしろ超自然的要素を排除する「自然主義」(naturalism) という哲学を前提としており，経験主義的科学とは区別されるべきであるという。[39]

(37) 森『宗教からよむ「アメリカ」』（講談社，1996年），181-86.

(38) 現在の創造科学の系譜については，Ronald L. Numbers, *The Creationists: The Evolution of Scientific Creationism* (Berkeley: Univ. of California Press, 1992) を参照。

このようにアメリカにおける進化論論争は依然として完全な決着をみていない。ブライアンはスコープス裁判での最終演説で次のように言った。「ここにおいて，裁判そのものとしては取るに足らないごく些細な裁判が闘われた。しかし，世界が関心をもったのは，それが重要な問題を提起したからである。そして，その問題は，我々の側または相手側の勝利という形で，いつの日か正当な決着をみるであろう」[40]。この論争がどちらの側の勝利に終わるのか，あるいは「単なる創造説」という第三の勢力が台頭するのか，今のところ，予断を許さない状況にある。

---

(39) Johnson, *Reason in the Balance: The Case Against Naturalism in Science, Law & Education* (Illinois InterVarsity Press, 1995).

(40) *World's Most Famous Court Trial*, 316.